

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：31303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01576

研究課題名（和文）一般均衡理論導入史における米田庄太郎：京都大学所蔵「米田文庫」を手がかりに

研究課題名（英文）Shotaro Yoneda in the History of Introduction of General Equilibrium Theory into Japan: Regarding the "Yoneda Papers" owned by Kyoto University

研究代表者

金井 辰郎 (Kanai, Tatsuro)

東北工業大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：90332022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：金井（2022）はノートの変データを整理した。金井（2023）および金井（2024a）は、初期ノート中で米田がウィニアルスキー、パレート、ワックスワイラーの力学的社会学（一般均衡理論）に言及した箇所を検討した。金井（2024b）は、ノート1～16における見出しを整理した。楠木（2023）、楠木（2024*）はシュンペーター導入史および米田から高田への影響他を検討した。楠木はそれらの点も含むシュンペーターの経済思想の研究書として楠木（2024）をまとめた。宮崎の口頭発表（2023）は米田の数理経済学研究を検討した。本吉（2024*）は米田の「sociology」を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

米田はノート（1908～9年他）において、ウィニアルスキー、パレート、ワックスワイラーの3人を挙げて一般均衡理論（GET）を紹介したが、(1)それは池尾(2006)の示したどの「ルート」よりも早い。また(2)その3人は、日本の初期GET研究者たちの多くが参照しているシュンペーター＝アモン＝カッセルとは異なる(金井 2024a)。一方、高田は、シュンペーターの『本質』他を読んで（1921年）初めてGETを理解できたという(楠木 2023、楠木 2024)、すなわち、高田は米田からGETの存在を聞いた一方で、他の研究者同様、シュンペーター他によって本質的理解を得た。これらは新知見であると思われる。

研究成果の概要（英文）：Kanai (2022) organized the metadata of all the notes in "Yoneda Papers." Kanai (2023) and Kanai (2024a) examined the parts where Yoneda referred to the mechanical sociology (general equilibrium theory) of Winiarski, Pareto and Waxweiler in the early notes. Kanai (2024b) compiled the headings in Notes 1-16. Kusuki (2023) and Kusuki (2024*) examined the history of introduction of Schumpeter's economics and other influences from Yoneda to Takata. Kusuki also published the book which had a broader perspective on Schumpeter as Kusuki (2024), including the points above. Miyazaki's oral presentation (2023) discussed Yoneda's inquiries on mathematical economics. Motoyoshi (2024*) examined Yoneda's "sociology."

研究分野：経済学史

キーワード：米田庄太郎 一般均衡理論 高田保馬 社会学 力学的社会学 L.ウィニアルスキー V.パレート 経済学読書会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明治～昭和期の社会学者・経済学者である米田庄太郎が、日本への一般均衡理論導入に果たした役割を、京都大学所蔵「米田博士講義録」を手がかりに考察した。一般均衡理論導入史において、弟子の高田保馬はしばしば言及されるものの、師米田の役割はほぼ無視されている。本研究では、「講義録」全 67 巻中に描かれている、「学問分類論」と称される学問体系の分類論(「social systematics」または「組織社会学」) また(方法的に一般均衡理論に類似する「力学的社会学」あるいは「数学的社会学」を包含する)社会学の「抽象的」理論(「societics」または「純正社会学」)の精査により、導入期経済学者米田の在り方を考えつつ、弟子高田他への影響を推測しようと考えた。

2. 研究の目的

一般均衡理論の日本への導入史という文脈における米田は、同テーマを扱った他の主要な先行研究ではほぼ無視されてきた。弟子の高田も、ときに、米田に「経済理論の説明を求めたことはない」(高田 1955)などとも言ったことから、その影響の度合いは今日まで疑われつつ増えてきたといえる。しかし、常識的に考えて、高田は米田から学ばずして一般均衡理論を知りえなかったはずであり、その影響は確かにあったことが推測される。本研究では、京都大学所蔵「米田文庫」中の「米田博士講義録」(それは高田が聞いたと思われる講義を含む)の精査を通じ、一般均衡理論導入史において、米田が高田に対して指導的役割を果たしていたか否かを、文献資料により検証しようと考えた。日本における「純粋経済学」の「主流の源泉」としての福田(徳三)に対し、「傍流の源泉」としての米田(高田 1948)の存在を浮かび上がらせることを目標とする。研究開始時点では、社会学・経済学の両分野において、「講義録」の<内容>を体系的に明らかにした研究はなく、本研究は唯一のものとなる。

3. 研究の方法

京都大学所蔵「米田文庫」に収められている「米田博士講義録」を手がかりに、米田＝高田ラインにおける一般均衡理論研究開始の背景を探る。「講義録」は全 67 巻あり、米田の京都帝国大学講師就任(1907 年)以降の講義ノートからなっている。それらは分量・内容ともに膨大であり、「学問分類論」と称される学問体系の分類論(「social systematics」または「組織社会学」) また(方法的に一般均衡理論に類似する「力学的社会学」あるいは「数学的社会学」を包含する)社会学の「抽象的」理論(「societics」または「純正社会学」) また社会の「具体的」研究(「sociology」または「総合社会学」) リッカート、デュルケム、コント、ジンメル、マルクス、マックス＝シェラー、マックス＝ウェーバー、パレートらの社会学説の検討、また哲学・倫理学に関する講義などを含む。

本研究では、特に日本への一般均衡理論の導入期における米田の役割を探るという問題意識に基づき、高田が経済学の研究を開始したとされる時期の前後における、上記 および に対象を絞って考察した。その際、「講義録」以外の米田の既刊の著作(米田 1906, 米田 1913, 米田 1929a ほか多数) また米田の講義を受けとめた側として高田の著作・回顧録(高田 1946、1948、1949、1955、1957a-1957h、1958a-1958g、1967、1969 など)も検討した。

米田の「講義録」は毎年行われる講義のノートである性格上、分冊間でかなりオーバーラップする部分がある。複数のノート間の関係を示すことで、「講義録」の構造も検討したいと考えた。その上で、米田が一般均衡理論(力学的社会学)に対して抱いていた考え方、またその具体的内容を整理しながら、最終的には米田が<その時期に>高田および学界(社会学・経済学)に対して与えた影響の意味を、文献的に実証することを企図した。

4. 研究成果

(1) に関連するノートの見出しのインデックス化

上記 および に関係する、膨大なノートの見出しのローデータの作成作業を外部に委託した。そこで得たデータはまず内部資料(金井ら 2021*)として整理したが、さらにその一部の内容を検証したディスカッションペーパーを金井(2024b)としてまとめた。今後も続編を出す予定である。

(2) 「講義録」全 67 巻のメタデータ整理

「講義録」に含まれる各ノートのタイトルについては、奈良県立同和問題史料センター(1998)がすでに一覧を掲載していたが、さらに京都大学文学研究科図書館の所蔵するマイクロフィルムの MS number、コマ数などを紐づけて各タイトルに対応させ、そのメタデータを金井(2022)としてまとめた。その際、可能な限り、執筆年代やノートの順序なども推測した。

(3) 初期ノートの精査

米田は、特にノート 2(1908～1909 年?) およびノート 67(1911～1916 年?)において、L. ウィニアルスキー、V. パレート、E. ワックスワイラーらの理論を力学的社会学として紹介している。それらの書かれた時期は、池尾(2006)の示す一般均衡理論導入の 4 つのルート(1921-22: 福田徳三が中山伊知郎らにクールノー、ワルラスの報告を指示 / 1926-29 年: アモンが東京帝大でカッセル体系を講義 / 1929 年～: 高田が京都帝大でカッセルの講義を行う / 1927-29 年・1931

年:中山と東畑がボン大学でシュンペーターを訪ねる・シュンペーター来日)のどれよりも早い。米田は米田(1911a)、米田(1911b)でも、W.オストワルトやウィニアルスキーらの力学的社会学を紹介したが、これら2論文に前後して、上記講義ノートでも類似の議論を扱っており、特にノート2はそれよりも早い時期のものであることがわかる(金井 2023, 金井 2024a)。

(4)経済学読書会他からみたシュンペーター導入史

高田はシュンペーターについては、小川郷太郎や京大の経済学読書会から影響を受けつつ、『経済発展の理論』(1912)に目を通していたが、ドイツ語圏への一般均衡理論の紹介を意図した『理論経済学の本質と主要内容』(1908)は入手することができず、読むことができなかった。その後、1921年の東京商大赴任にともない、同大図書館にあった『本質と主要内容』を借りることで、初めて読むことが可能となり、シュンペーター経済学に本格的に取り組むとともに、一般均衡理論を理解した(楠木 2023)。楠木はそれらの点を含み、さらに広いパースペクティブに立つシュンペーター経済学に関する研究書(楠木 2024)もまとめた。

(5)高田の一般均衡理論研究の起源

楠木(2024*)は、高田の一般均衡理論研究の起源を検討した。

(6)米田による既刊の数理経済学関係文献の検討

宮崎の口頭発表(2023)は、1929年から1937年に公刊された米田の数理経済学に関する研究に関して、その構成、内容を検討した。

(7)米田の「societology」に関する調査

本吉(2024*)はノート20を主な対象として、米田のsocietologyのうち「社会進化論」をめぐる米田の扱いを紹介した。

(8)研究目的に照らした本研究の結論

上記(3)および(4)より考えて、以下のような解釈が可能であると思われる。まず(3)より、米田は確かに初期講義で学生高田に対して一般均衡理論(力学的社会学)を紹介しており、そこで高田は同理論に関する学説的な知識を得たと考えられる。またその講義が行われた時期は、現在までの一般均衡理論導入史研究が解明している、どの導入期よりも早く、米田の初期講義の意義は評価されるべきであると思われる。安井琢磨などわが国の初期一般均衡理論研究者が、典型的にはシュンペーター=アモン=カッセルから同理論を学んでいるのに対して、ノート2、ノート67などにみられる米田は、その系統とは異なるウィニアルスキー=パレート=ワックスワイラーを論じている。また(4)によれば、高田は、1921年に東京商大に異動後、『本質と主要内容』を読むまでは一般均衡理論を理解できなかったが、同書を読んで初めて理解できたという。すなわち、高田は確かに米田から一般均衡理論の存在を教えてもらいながらも、当初はその内容を理解できず、結果的には他の初期研究者と同様、一般均衡理論は自らシュンペーターを学ぶことによって理解した可能性が高い。このことが正しいとすると、確かに米田は高田の一般均衡理論研究に直接的な指導をしていないかもしれないが、反面、高田も含めて他の初期一般均衡理論研究者がシュンペーターに依拠して初めて同理論を理解・導入したのに対して、米田のみがシュンペーター抜きで日本への導入を果たしたといえそうである。このような解釈は、今日までの一般均衡理論導入史研究において示されていなかったと思われ、意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金井辰郎	4. 巻 17
2. 論文標題 京都大学大学院文学研究科所蔵「米田博士講義録」所収 ノートの見出しについて(I)：ノート1～16	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Discussion Paper Series (東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科)	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金井辰郎	4. 巻 16
2. 論文標題 米田庄太郎初期講義ノート (ノート67) における力学的社会学：Winiarsky・Pareto・Waxweiler	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Discussion Paper Series (東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科)	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楠木 敦	4. 巻 63(1)
2. 論文標題 「経済学読書会」から見たシュンペーター経済学の導入	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北星学園大学経済学部北星論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金井辰郎	4. 巻 15
2. 論文標題 「米田博士講義録」ノート2：特にWiniarskiへの言及をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Discussion Paper Series (東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金井辰郎	4. 巻 14
2. 論文標題 京都大学大学院文学研究科図書館所蔵「米田博士講義録」の 構造：メタデータによる概観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科 Discussion Paper Series	6. 最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 楠木 敦
2. 発表標題 高田保馬はどのようにして一般均衡理論を知ったのか？ー経済学読書会を中心にして
3. 学会等名 北星経済研究会（於北星学園大学・オンライン）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 宮崎義久
2. 発表標題 経済学者としての米田庄太郎 数理経済学派の方法論をめぐって
3. 学会等名 経済学史学会北海道部会2023年度第2回研究報告会（於北星学園大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 楠木敦
2. 発表標題 日本におけるシュンペーター経済学の導入 福田徳三と高田保馬を中心として
3. 学会等名 経済学史学会北海道部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 楠木 敦
2. 発表標題 高田保馬における一般均衡理論の受容
3. 学会等名 仙台経済学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金井辰郎
2. 発表標題 京都大学大学院文学研究科図書館所蔵「米田博士講義録」をめぐって：メタデータの検討と研究展望
3. 学会等名 仙台経済学研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 楠木 敦	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 221
3. 書名 シュンペーターの経済思想 - ヴィジョンと理論の相剋	

1. 著者名 金井辰郎・楠木敦・宮崎義久・本吉祥子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 (金井辰郎・楠木敦・宮崎義久・本吉祥子)	5. 総ページ数 78
3. 書名 科研費報告書「一般均衡理論導入史における米田庄太郎：京都大学所蔵「米田文庫」を手がかりに」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔未公表〕

楠木 敦（2024*）「高田保馬はどのようにして一般均衡理論を知ったのか？ 経済学読書会を中心にして」。科研費報告書『一般均衡理論導入史における米田庄太郎：京都大学所蔵「米田文庫」を手がかりに』、2024年3月。

本吉祥子（2024*）「米田庄太郎の総合社会学と進化概念について 米田講義録第8 巻ノート20 より 」。科研費報告書『一般均衡理論導入史における米田庄太郎：京都大学所蔵「米田文庫」を手がかりに』、2024年3月。

金井辰郎・楠木敦・宮崎義久・本吉祥子（2021*）「米田博士講義録：各ノートのタイトルおよび見出しからみたその構造」、DVD、2021年3月31日。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	楠木 敦 (Kusuki Atsushi) (50711420)	北星学園大学・経済学部・准教授 (30106)	
研究分担者	宮崎 義久 (Miyazaki Yoshihisa) (60633831)	宮城大学・事業構想学群・准教授 (21301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	本吉 祥子 (Motoyoshi Sachiko)	東北学院大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------